

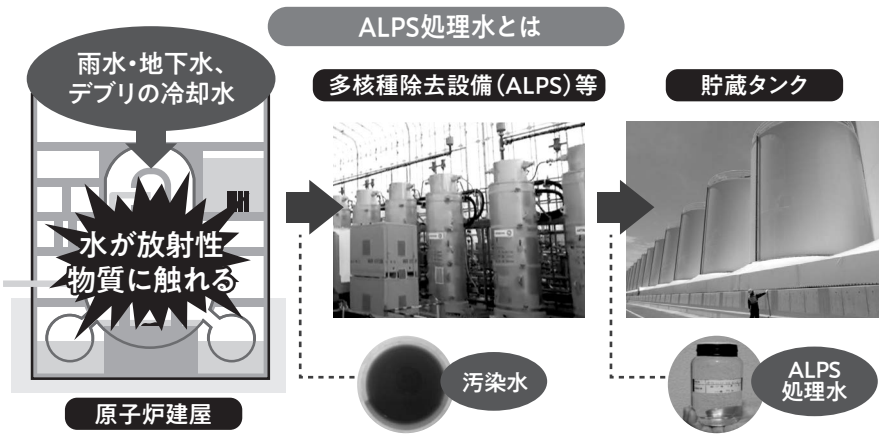


鎌倉学園高等学校

# 福島復興へ 〈紙上採録〉

# みんなで考えよう ALPS 処理水のこと

東日本大震災の発災、そして東京電力福島第一原子力発電所の事故から12年。今年は原発廃炉作業の一環として、ALPS処理水の海洋放出が始まる見通しです。経済産業省は処理水への理解を深めてもらうため、全国の高校生を対象とした出張授業を開催。生徒たちは処理水や海洋放出の安全性、風評への対応などについて考え、意見を交わしました。授業の様子を紹介します。



**ALPS 処理水とは？**  
 廃炉作業の中で重要となるのが、ALPS 処理水の海洋放出です。講師は処理水について「福島第一原発の建屋内にある放射性物質を含む」

**ALPS 処理水とは？**  
 講師を務めた経産省の職員は「廃炉作業は環境へのリスクを減らし、安心して暮らせるふるさとを取り戻すための取り組みで、福島の復興の大前提だ」という思いで携わっています」と生徒に語りかけました。

**ALPS 処理水とは？**  
 講師は「ALPSで処理しても残ってしまうトリチウムを例に説明しました。放出時の処理水に含まれているトリチウムの濃度は、国のトリチウム安全基準の40分の1未満にします」

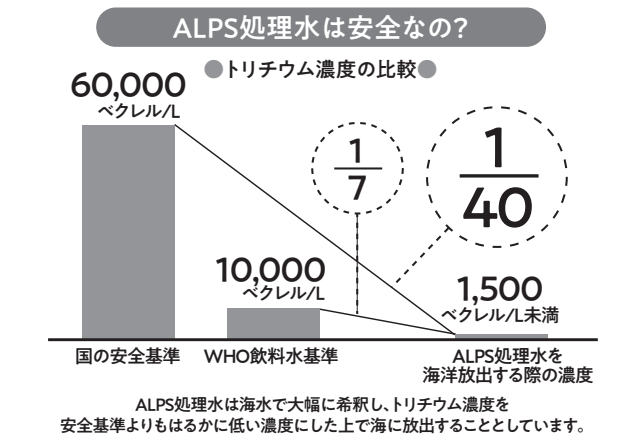
**ALPS 処理水とは？**  
 また、安全性が守られているかどうかのチェックも必要不可欠です。これについては、海洋放出の前後で海中の放射性物質の濃度に変化がないか第三者でもわかるようにモニタリングする仕組みがあるとし、国際原子力機関 (IAEA) も安全基準にのっとっているかどうか、厳しくチェックしている」と説明しました。

**ALPS 処理水とは？**  
 処理水は海に放出した際に最も懸念されるのが風評です。地元漁業者が「魚が売れなくなってしまうのではないかと」の声も上がっています。授業で講師は、国際的に認知された

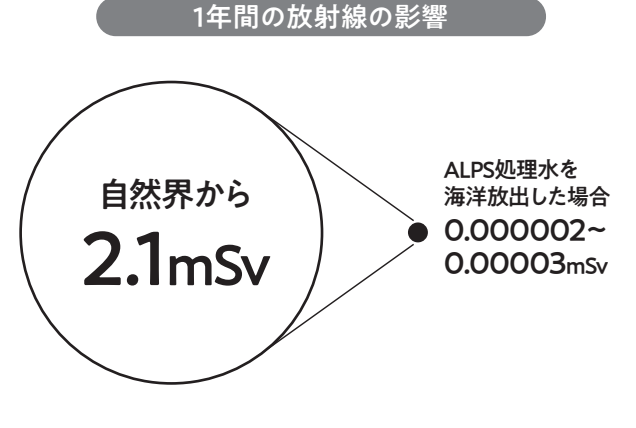
**ALPS 処理水とは？**  
 風評対策は？  
 処理水は海に放出した際に最も懸念されるのが風評です。地元漁業者が「魚が売れなくなってしまうのではないかと」の声も上がっています。授業で講師は、国際的に認知された



処理水の貯蔵タンクが並ぶ福島第一原発=2019年4月、福島県提供；東京電力ホールディングス 撮影者：西澤丞



ALPS処理水は安全なの？



1年間の放射線の影響

**廃炉作業のこれから**  
 福島の復興を進めるため、今年春から夏ごろに処理水の海洋放出を始め、廃炉作業を進める方針ですが、処理水の処分以外にも、炉内の核燃料が溶けた燃料デブリの取り出しや原子炉の解体、廃棄物の処分などもあり、2041年から51年までに終了することを目標に作業を進めます。原発の構内では、いまま廃炉作業のため1日約4千人が働いています。構内の放射線量は大幅に低下し、一般作業服で作業できるエリアは約96%まで広がりました。

**海に放出、大丈夫？**  
 たまたた処理水を処分する方法として選ばれたのが、海洋への放出でした。世界中の多くの原子力施設が安全基準を守った上で実施している方法であり、専門家や全国からの意見を踏まえた上で、21年4月に決定しました。では、安全基準とはどんなものなのか。講師はALPSで処理しても残ってしまうトリチウムを例に説明しました。

**海に放出、大丈夫？**  
 「放出時の処理水に含まれているトリチウムの濃度は、国のトリチウム安全基準の40分の1未満にします」

**海に放出、大丈夫？**  
 また、安全性が守られているかどうかのチェックも必要不可欠です。これについては、海洋放出の前後で海中の放射性物質の濃度に変化がないか第三者でもわかるようにモニタリングする仕組みがあるとし、国際原子力機関 (IAEA) も安全基準にのっとっているかどうか、厳しくチェックしている」と説明しました。

**海に放出、大丈夫？**  
 処理水は海に放出した際に最も懸念されるのが風評です。地元漁業者が「魚が売れなくなってしまうのではないかと」の声も上がっています。授業で講師は、国際的に認知された

**海に放出、大丈夫？**  
 風評対策は？  
 処理水は海に放出した際に最も懸念されるのが風評です。地元漁業者が「魚が売れなくなってしまうのではないかと」の声も上がっています。授業で講師は、国際的に認知された

**海に放出、大丈夫？**  
 風評対策は？  
 処理水は海に放出した際に最も懸念されるのが風評です。地元漁業者が「魚が売れなくなってしまうのではないかと」の声も上がっています。授業で講師は、国際的に認知された

## 処理水放出時に懸念される風評について生徒たちが「自分事」として議論しました

**島根県 県立松江農林高等学校**  
 1年生4クラス 144人が参加

中国電力島根原子力発電所のある松江市で開催された授業では、講師を務めた経産省職員が廃炉の現状やALPS処理水の処分に関する風評対策について伝え、生徒たちに「自分事として考えてほしい」と投げかけました。授業の後半では、生徒同士が意見交換。「(放出後の)モニタリングは、どこでどのようにするのか」という質問が出たり、「ALPS処理水と聞いて、漠然と怖いと思っていた」「ALPS処理水について色々な人に伝えていくことが大切だと思った」「正しい知識を得ることが必要」などとの意見が出たりするなど、講師と活発なやりとりが交わされました。

**岐阜県 県立岐阜高等学校**  
 1・2年生 30人が参加

講師を務める経産省職員が、震災当時から現在に至る福島第一原発の状況や、ALPS処理水の海洋放出について説明。生徒からは「科学的根拠を踏まえた詳しいことを知る良い機会になった」「知名度が低いことが不安の原因」「もっと社会的に認知され、議論されるべきだ」との声が上がりました。また、「人にも動植物にも影響はほとんどなく、安全であることがわかった。ただ、安全=安心ではないから難しい」「今後も意識的に調べていきたい」との意見も寄せられ、講義終了後には講師への質問の列ができました。

**宮城県 名取北高等学校**  
 2年生3クラス 102人が参加

今年の春から夏ごろに見込まれるALPS処理水の海洋放出について、講師の経産省職員が「風評について、私たちもどうすれば防げるか、日々悩まながら仕事をしています」と伝えると、大きくうなずく生徒も。意見交換の場では「地元にある東北電力女川原子力発電所の再稼働についてどのように考えているか」という問いのほか「ALPS処理水について、名前だけは聞いたことがあったが、適切に処理された安全な水であることを知れて良かった」「安全性について、この先も根拠よく伝えていく必要があると感じた」などの感想が述べられました。

**神奈川県 鎌倉学園高等学校**  
 1年生 24人が参加

昨年の12月に福島県を訪問し、地域の人や東京電力の担当者とお話したという鎌倉学園の生徒たち。講師の経産省職員は「海洋放出について、うわさや間違った情報に流されず、科学的根拠に基づく判断と選択してほしい」と伝えました。ディスカッションでは、「安全性の追求も大切だが、正しい情報を伝えることの重要性に気づいた」「トリチウムについて、身近で危険度の低いものだと思わせる必要があるのではないか」「風評対策として福島県の魚を釣って、料理するなどツアーを企画してはどうか」など、多面的な意見と提案がありました。

**福島県 県立相馬総合高等学校新地校舎**  
 2年生2クラス 46人が参加

講師を務めたのは、福島県出身で福島の現地事務所に勤務する経産省職員。地元の生徒たちに向けて授業を行いました。ワークショップでは、「思っているより汚染物質対策の現状が進んでいた」という前向きな言葉がある一方で、「処理水の海洋放出を政府が勝手に決めるのは、漁師の方の尊厳を損なうのではないかと」という厳しい声も。講師は、専門家による6年以上にわたる検討などを踏まえ、海洋放出を行う政府方針を決定した経緯を説明するとともに、「私も福島出身。福島の魚が正しく評価されるよう、その魅力や正しい情報を発信し続けていく」と約束しました。